令和６年 12 月３日

研修だより 48 号

Why を考えること

小笠原康晃

袋井市では、授業を見合うことを勧めています。

日常的に、学校の中で授業者が授業を見合うことを、校内研修として行っています。

少し、立ち止まって考えてみましょう。

授業を見合うことは、どうして必要なのでしょうか。

「それは、これからの働き方に一番あった授業改善の方法だからではないか」と私は考えています。

かつて、１年に１回の研究授業の検討会では、管理職や学年・学年団の職員が集まり、検討をしました。定時を過ぎ、夜９時になるまで検討をすることもありました。

授業者は休日を返上し、指導案作成に大変多くの労力を費やしました。

このような条件があったからこそ、１年に１回の研究授業は授業者の授業改善や授業力の向上に繋がりました。

しかし、現在このようなことをすることはほぼ不可能です。

働き方改革が求められる中、多くの職員の時間を使い、授業者の指導案検討をすることは難しいです。

同じようなことをしても、その効果は何十分の一になってしまいます。

そのために、別の方法が必要となります。

「授業を見合い、対話をすること」こそが、必要とされていることです。

しかも、個人による実施ではなく、組織・チームとしての実践が求められています。

本校でも、学年団を中心に授業を見合って話し合う取組をしていただいています。

「教育現場は子供たちに「What（何を使って)」「How（どのように)」を使い教えることのプロの現場である」という話を以前聞いたことがあります。

そして、「そこに Why（なぜ）が入ると、目的がはっきりとして、より良いものになる。だから、「なぜそれをするのか。」「その目的は何なのか」を考えることが大切です。」という話が続きました。

笠原小の強みである「学年団を中心に授業を見合う」ということを、もっともっと伸ばしていきたいと思います。

ぜひ授業を見合っていきましょう！！